

# 就学前児童の父親への子育て支援

## —その研究動向と実践展開—

学校教育学専攻

幼年教育コース

M07021D

高見 典宏

現在わが国において少子高齢化，核家族化が進む中，女性に対する子育て支援が推進されてきた。国は様々な施策を提言し，少子化問題に対応しようとしている。これらの社会変化に伴い，子育ては，従来の「女性は家庭で育児」とする考え方から，「父親も母親も育児・家事」をする考え方が一般化されてきた。そのため，家庭における父親の役割や育児参加が注目され，重要視されてきた。今後，父親の育児参加はますます重要なものになると考えられる。これらを踏まえ，幼稚園・保育所は，女性が働きやすい社会にすることや男性が積極的に育児・家事に携わるようにするために，大きな役割を担うことになるであろう。

本研究では，父親への子育て支援を行う意義を明確にし，父親への子育て支援における実践の方向性を探ると共に現在行われている父親への子育て支援の効果について検証する。

現代の父親が置かれている歴史・文化・社会的状況を把握し，その上で，父親に対する子育て支援が実践と先行研究のレベルでどのように展開しているのか整理し，現行されている子育て支援を参観し，インタビューを行う。父親への子育て支援がどのような内容で展開され，その支援が支援する側や父親にどのような効果をもたらしているか明らかにするものである。

第1章では，性別役割分業意識の歴史の変遷と父親の役割，父親に対する子育て支援の意義を追いかけた。「父親は外で仕事，母親は家庭で育児・

家事」という現在に根強く残る性別役割分業意識は，明治初頭あたりからの国策として醸成されてきた。これらの意識は，現在でも未だ根強く残り，母親が働きたいと願おうとも，子どもの手のかかるうちは，仕方なく家庭で育児・家事に追われる生活を送っている場合が多い。女性の自己実現に向けての社会進出は，人権の世紀の社会的課題として重要視される。父親と母親が共に自分のやりたいことができ，家庭における父親と母親のそれぞれの役割を果たす。これが本来あるべき性別役割分担なのであろう。

これらを実現させるため，父親が積極的に子育てに参画するには3つの課題を乗り越えなければならない。第1に長時間労働，第2に依然として根強く残るステレオタイプの性別役割分業意識である。そして第3は父親としての発達不全である。ステレオタイプの性別役割分業意識を変革して，父親として自らが気付き，考え，行動に移すことが求められている。

第2章では，幼稚園・保育所・NPO法人で現行される父親への子育て支援が第1章で取り上げた3つの課題をどのように汲み取り，展開しているのかを探り，多種多様な父親への子育て支援の内容についてまとめることを試みた。日本各地で実施されている父親への子育て支援は，大きく分けてイベント型，運動型，造形型，勉強型と4つのカテゴリーに分類することが可能であった。しかし，4つのカテゴリー全てを実施している園は非

常に僅少であった。次に、父親に対する子育て支援の先行研究を取り扱い、研究数やその動向を把握すると共に、カテゴリー分けを通して父親への子育て支援における研究課題を整理した。その結果、支援者、父親両者を対象にした研究は非常に少ないことが確認された。

そのため、第3章において、4つのカテゴリー分類された子育て支援内容を実施し、なおかつ父親への子育て支援を持続的に行っている幼稚園を調査対象とし、フィールドワークの成果をまとめた。とりわけ、父親に対する子育て支援の概況や支援者の意識、父親への効果、両者が抱える課題点について、インタビューを通じて検討した。

幼稚園が抱える課題は、今の支援が精一杯であるということである。しかし、父親への子育て支援を通し構築された父親同士のネットワークの広がり、園にとっても非常にプラスの効果をもたらしていることが明らかとなった。そのようなメリットがあるからこそ、父親への子育て支援が有効な結果を出していけるよう力を注いでいく必要がある。

一方、父親への効果であるが、4つに分類された父親への子育て支援内容は、第1章で取り上げた3つ課題に対し有益に働いていた。妻と家事や育児を分担していくことや、父親としての成長を感じられる機会の保障になっているということが父親のインタビューから窺えた。つまり、4つのカテゴリーを全て実施することで、初めて父親への効果として現れるのであり、大半の幼稚園が実施している、イベント型のみの子育て支援では、あまり効果は期待できないのではないかと考えられる。また、父親が園に参加しやすくしている要因として男性保育者の存在が挙げられた。男性保育者に対するインタビューを実施した結果、男性保育者は父親に対し、モデル役割を提示している

ことが明らかとなった。その意識が男性保育者と子どもとの関係性を充実させ、それを父親が学び、家庭でも活かそうとする。その育児への介入姿勢が、母親の父親に対する評価へと繋がり、その様子を母親が幼稚園に来園して男性保育者に語る。こうした循環を通じて、男性保育者の自信が深まり、保育者としての資質を高める努力へと繋がっていくことが示唆された(図1)。

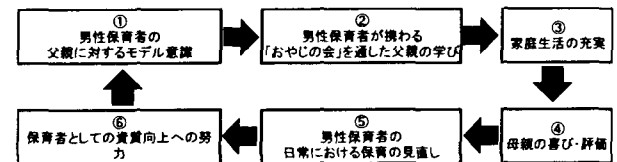


図1 「おやじの会」がもたらす効果サイクル

現在日本において、父親の帰宅時間を早めること、母親の就業率を高め、さらに出産後も働きやすくする社会体制を整えることが求められる。男性にとってケアとはあくまで受けるものであって、自分がケアの提供者になるという発想は薄いこと示した先行研究がある。このような父親の意識が、女性の家事・育児時間の長さに反映されている。今後の子育て支援を進めていく上で、父親がケアの提供者になるよう促す機会の増加が求められる。また、固定的な「ジェンダー」意識の克服も必要となる。女性の育児・家事時間の長さ等に現れる性的不平等をいかに無くすのか、常に問い続けることが父親はもちろんであるが、支援者側にも求められる。

本研究では、支援者・父親の意識調査が必要最小限であった。より多くのライフスタイルを持った父親を調査できなかったことは残念であった。保育現場に出た際には、積極的に父親への子育て支援に参画するとともに、父親の言葉に耳を傾けながら、子どもと父親双方を支援していきたいと考えている。

主任指導教員 横川 和章 教授

指導教員 佐藤 哲也 准教授